

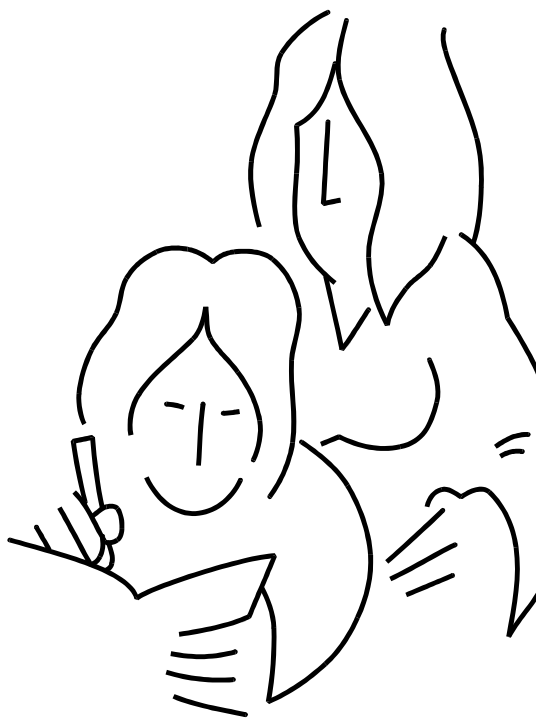
<アメリカ生まれ>

我が家の子ども達は、Toddlerになると全員、アメリカの環境の中で育つようにと、おしめも取れないうちから保育園へ行かされました。そんな子ども達ですから、アメリカ人家庭のように、わが子も英語を自然に身につけて当然という、根拠のない自信から勘違いをしたのでしょう。そして、子ども達の現地校に関することは、学校からのお知らせや親のサインが必要な書類を読むくらいで、私が子ども達に手を貸したということがほとんどありません。すべて子ども任せにしてきました。

たとえ「アメリカ生まれ」の娘でも、英語の基礎的なことが分かっていなかった可能性を、私は思いつきもしませんでした。それは、同じ大学寮に住んでいて、ドイツ人と結婚された日本の方から、「日本で身につけた少々の英語力で勉強を見てあげると、反って子どもの混乱を招く」と聞いていたからです。その方の考え方は、お子さんの「話す英語に特徴的な癖がある」と現地校の先生から指摘され、発音も英文法も家庭で習うものとネイティブのそれとは異なるので、「家では子どもに英語で話さないでください」と、注意されてのことでした。

渡米間もない頃にこの話を聞いて、外国での生活を経験する中で、少々の英語力では自分自身のこともままならない状態だったため、納得できるものでした。子どもの現地校に関する私の方針を、「無関心にならない」ように、でも「餅屋は餅屋に」任せ、そして「子どもは自然に環境の中で育つ」と信じて、子ども達のすることに「手を出さない」ことにした、その大きな理由の一つと言えます。

そんな理由から、子ども達が英語で困っていた時に、何の力にもなれていなかったことに、親として不甲斐なさを感じ、そんなこととは「知らなくてごめんね」と言いますと、返ってきた言葉が「いいじゃない。お母さんが英語に自信がないというの分かってたし、自分でどうにかなったんだから、私にとっては反ってよかったの」、だそうです。



< Home Work Assignment >

子ども達は環境の中であって、自然に英語を身に付けたわけではないようです。娘たちなりの努力の結果がもたらしたのだということが、次女の話からうかがえます。

現地校の宿題などについては、子ども達が家で勉強する姿を見た、という記憶がありません。それは、私が現地校の宿題を手伝ったことがないからです。小学校2年生の次女が自分から頼んで、ドリルを買ってもらったという「やる気」に驚きながらも、子ども達が独力で英語を身につけていかなければ

ならなかった家庭環境があり、そうしなければ現地校の勉強にも付いていけなかったというのは、明らかです。しかも、話し言葉にまったく不自由してなかったのに、ESLのクラスで勉強させられたり宿題に困ったりして、「大変、自分は英語ができないのだ」と自覚し、次女は家庭学習としてドリル練習することで、自分の足りないところを補うことを知ったのです。

ある機会を得て、ESLの先生方のためのTESOL(Teachers of English to Speakers of Other Languages)研修会に参加させてもらい、アメリカでの宿題の意味を教えてくださいました。現地校の宿題の目的の一つに、子ども自身が「理解できているかどうかを知るため」と、それを補うためだということです。次女が言うには「Mechanicsが出来なくて大変だった経験」がきっかけとなりましたが、自分が理解できないところを知り、自分で勉強できるような、現地校での指導の賜物でもあるのでしょうか。

<親の居ぬ間に>

親はなくても子は育つと言いますが、ただ放っておいて育つというわけではありません。親が手を貸さない分、誰かの手を頼り、そして子ども自身の努力に依るところが大きいのだと、自覚を新たにするばかりです。



会話が出来ること(生活言語)と勉強が出来ること(学習言語)は、どんな言語でも、異なるものです。

家庭で日本語、学校では英語と、バイリンガルで育っている子どもにも言葉の躓きはあります。日本語の場合は保護者の皆さんがすぐ気づきますが、英語では見過ごしてしまうこと、時には子ども自身でも分からない場合があります。康子さんの経験した出来事の紹介でした。